

## 私の名前を呼んでください

南相馬市立鹿島中学校 3年 清水 りよな

二年前の中学一年生。私は、人間関係にひどく悩み、苦しんでいた。他人の視線が怖い。朝、教室に入ることが怖い。背後から微かに聞こえる笑い声が怖い。私は常にそう感じて、他人に怯えていた。私がこう感じるようになったきっかけは、小学校の頃から仲の良い、三人の友達だった。

緊張と興奮で胸が高鳴った入学式とクラス発表。私は一組で、その三人とは違うクラスになった。見慣れない顔。違和感のある上履き。地に足がつかない気持ちで、入学して二日目を迎えた。それと共に、昨年よりも遙かに美しい春を実感した。

中学生になり、一週間ほど経つと、クラスは賑わい、友達も増えた。教室の前の廊下から、あの三人の笑い声が聞こえる。私も混ざりたいと思い、勢いよく教室を飛びだして三人の元に駆け寄った。あまりに楽しそうだったので、「どうしたの？」と尋ねた。すると、今までの賑わいが、無かったかのように場は静まり返った。心臓がキュッとなった。三人から向けられる、氷の様に冷たい視線。息ができない程に重たい空気。それらは私に、「自分はいらない」という事実を悟らせた。私はいたたまれなくなり、用事があると嘘を吐いて、その場から逃げて女子トイレへ駆け込んだ。異様に冷たい手。どんどん大きくなる心音。視界がぼやけて、手の甲に水滴が落ちた。涙を流していると自覚すると、色々な疑問と感情が込みあげてきて、涙が止まらなくなった。今までとは全く違う三人の様子は、「勘違い」の一言で片付けてしまいたいと思う程に悲痛で、切ないものだった。

翌日になり、学校へ向かうために車から下ろす足は、鉛がついているのかと思う程に重かった。階段を一段一段上ると共に、不安も大きくなっていった。やっとの思いで教室へ入ったが、私はすぐにトイレへ駆け込み、朝の学活が始まるまでの憂鬱な時間を、トイレで独り過ごしていた。そんなことが日常になり、他人に怯えて過ごす学校生活が始まった。日に日に呼ばれなくなった私の名前。以前よりも遅らせた登校時間。そんなことが続くと、私は、日を重ねる毎に思い込みが激しくなった。後ろで話している男の子と女の子。私のことを話している訳ではないとわかっているけど、「私のことだったらどうしよう」「一緒にクラスでごめんなさい」と思うようになってしまった。最初は、あの三人

だけが怖かったが、「皆にも嫌われたらどうしよう」という思い込みから、私は無意識に、皆と距離を置くようになった。終わりのみえない不安と恐怖で、家に帰ると涙を流す毎日だった。

今日もまた、いつものように朝の学活が始まった。しかしその日は、珍しく出席確認があった。自分の名前を急に呼ばれ、ハッとした私は、咄嗟に「はい」と返事をした。嬉しかった。名前を呼ばれただけで嬉しいというのは、おかしいのかもしれないが、久しぶりに名前を呼ばれ、自分はちゃんとこのクラスの一人だよと言われた気がして、ものすごく嬉しかった。その日から、毎日出席確認が行われるようになった。その、一日の中のほんの僅かだけど尊い時間が、私は大好きだった。自分の名前を呼ばれると、嬉しく、前向きな気持ちになった。私は、どんなに小さいものだとしても、この気持ちを糧に頑張ろうと思えた。初めに、笑顔を絶やさないこと。次に、勇気を出してあいさつをすること。人の目を見て話すこと。ポジティブに考えること。私は、少しでも前に進むために、このようなことを心得て生活するように意識した。

しばらくすると、私に話しかけてくれる人がたくさんできた。自分から話しかけたいと思う人も、私に相談事をしてくれる人もいた。だけど私はまだ、心の底から友達だと胸を張って言える人はいない。でも、いつかはできるといいなと思いその日を心待ちにしている。

私は、このような経験を経て、自分をもって生きることの難しさと、初めの一步を踏み出す勇気の大切さを知った。もし、二年前の私と同じ現状の人がいるなら、私はその人に、ほんの些細なことでも構わないから、日々の小さな出来事に目を向け、耳を傾けて生活してほしいと思う。それと共に、毎日が苦しく、憂鬱なものならば、休むことも、一時的に現状から逃げることも、悪いことではなく、必要なことだと伝えたい。自分を殺して我慢ばかりしていると、感情という素晴らしいものを失い、自分で自分がわからなくなってしまう。そうなる前に、毎日を必死に頑張っている自分自身を沢山褒めてあげてほしい。「偉いよ」と言ってあげてほしい。すると徐々に、毎日が良い方向に変化してくる。さらに、小さなことにもありがたみを感じて生活すると、自然と日常が鮮やかなものになってくる。

なので私は、毎日を必死に頑張っている人たちの名前を呼んで、背中を押してあげることができたらいいなと思う。